

びんそぎして、そのひとふさの髪の毛を、さがりばといふ髻剪の異名ともいはゞいふべし。
〔源氏物語三空蟬〕かみは、いとふさやかにて、ながくはあらねど、さがりばかたのほど、いとよきに、
すべていとねぢけたる所なく、おかしげなる人とみえたり。

〔源氏物語二乙女〕姫君の御さまの、いとよきびはにうつくしうて、さうの御ことひき給ふを、御ぐしのさがりば、かんざしなどのあでになまめかしきを、うちまもり給へば、はぢらひてすこしそばめ給へる、

〔枕草子八〕うらやましきもの
かみながくうるはしう、さがりばなどめでたき人、

〔書言字考五節用集五〕蟬髻ト

〔金葉和歌集七〕ものいひける女の、かみをかきこして見けるをよめる、
津守國基
朝ねがみ誰手枕にたはつけてけさはかたみにふりこしてみる

〔源順集〕思

わすれずもおもほゆる哉朝なく、しか黒かみのねくたれのたわ。

〔玉勝間八〕髪のつと、たを、

いまのよ、女の髪ゆひて、後ツレと左右へはり出したるところを、つとといふを、あづまにては、たをといへり、
略 中 うつぼの物語藏開卷に、たゝおほとのごもりなば、御ぐしにたわつきなんす、
略 中 たわたを同じ言也、たゞしいにしへのは、枕にあたりたる所に、おのづから出来たるをいひ、

今のは、ことさらにつくる也、

〔歴世女装考四〕たばの名義

此説玉勝間にて、たばはたわの轉語にて、髪にくせのつきて、膨脹かたる古言なるを、をゑるべし、異本枕